

『不埒なファッション』

著：崎谷はるひ

ill：タカツキノボル

真幸はふだんならばけっして、友人の色恋沙汰について口が軽いほうではない。けれどこの夜はなぜだか、言葉が途切れるのが怖かった。そのため、会話を選ぶこともできず、さきほど日比谷と話したばかりの和典のことについて、あれこれと話し続けた。「……でね、日比谷は気づいてなかったみたいなんだけど、だいぶまえからその子、俺らのいく店とかに出入りしてたんだ」

「そうなのか？」

「つきあいだしたのは一年まえだけど、あれ、かなりまえからずっと好きだったんじゃないかな。だいぶルックスとかも変わって、ぱっと見はわからない感じになってたけど、あれも日比谷の好みにあわせてがんばってるのかなって」

並んで歩きながら、妙にはしゃいだテンションで話し続ける自分の様子がおかしいことも、たぶん直隆は気づいていたのだろう。

けれど追及することはなく、黙って見守ってくれている。

その態度が、彼にとってかなりの忍耐を要することくらい、わかっていた。

—まじめにナオさん尊敬するわ。辛抱強いわよねえ。

日比谷が言うとおりに、彼はいつも真幸が悩むと黙って静観してくれる。ありがたいと同時に、譲らせているなあ、とも思う。

本当は直隆が、あまり我慢強い性格ではないことも知っている。庇護欲が高まるあまり過干渉になりがちなのは、未直や自分に対しての彼の言動で、十分に承知している。

たぶんもっと、素直に接すればいいだけなのだ。素直にあまえて、あまやかしてもらえばいい。もうわかっているのに、二年もそうしてきたのに、わだかまりが真幸の態度を上滑りなものにしてしまう。

そして、そういう真幸に対しての直隆の我慢も、限界に近づいているのは肌で感じた。

「……真幸」

「うん？」

「無理をして、あれこれ話さなくてもいい。本当に言いたいことは、それではないだろう」

静かな直隆の声に、真幸は口をつぐんだ。他人のことをぺらぺらとしゃべっていた自分が恥ずかしくなり、浮かべていた笑みも見ると同時に消えていく。

叱られた、というほど強い物言いではない。出会ったばかりのころのように、けんか腰な態度でもない。けれど、彼の声には逆らえないなにかが含まれていた。

「ご家族のほうは、どうなってる？」

「ん、あ、まあ、心配いらないよ」

言ったとたん、直隆があからさまに顔をしかめた。

(ごめん)

自分でも嘘くさいのはわかっていた。このところ、あからさまに真幸のメンタルはグダ

グダになっているし、顔にも態度にもでているのは日比谷ほか、バイト先の店長にも指摘されている。そして、本来あまえるべき相手にあまえろと再三言われているにも拘わらず、なぜかできないままでいた。

「まだ、話す気になれないか」

「……ごめん」

「謝ってほしいわけではないんだが」

ふっと直隆が息をつく。ずっしりと空気が重くなって、真幸は肩をすくめた。

目のまえには、ふたりで暮らすマンションが見えている。人通りはなく、けれど直隆はすこし以前、駅前ですうしたときのように、手を取って歩こうとはしない。

(あたりまえだろ。誰が、そうさせた)

さきに壁を作り、閉めだしたのはどちらのほうだ。唇を噛んで、真幸は数歩さきに行く恋人の広い背中を眺め続けた。

お互い無言のまま部屋に戻り、玄関のドアを閉めたとたんに沈黙が耳についた。さほど長くもない廊下を進み、台所から間続きの居間へと脚を進めたのち、ぶるりと身震いする。室内は、さきほどまで直隆がいたせいであたたかかったが、外気温との差で肌がそそけたつ。

「えっと……食事は？」

おずおず声をかけると、直隆は「ああ」とまるっきり忘れていたような声を発した。そして、手にしていたビニール袋を掲げてみせる。

「なんだか、歩くうちに食欲も失せたな。きょうはもう、これでいい」

「でも」

「いいんだ」

怒っているわけではないと教えるように、直隆は微笑んで真幸の頭を撫でてくる。やさしい手つきにどうしてか—いや、やさしいからこそ、胸が苦しくなった。

「さっきは悪かった」

「なん……なんで、直隆さんが謝るんだよ」

「真幸には真幸なりの悩みもあるだろうし、言いたくないこともあるだろう。それを咎めるような物言いになった」

また、譲らせた。そのことがどうしてかつらくてたまらず、真幸は唇を震わせる。

申し訳ない、ありがたい、けれど、それがひどく—このいま、わずらわしい。

(やばい、だめだ)

ヒステリーを起こしかけていることに気づいて、どうにか呼吸を整えようとした。ものすごいやつあたりをしてしまいそうになっている。

「ごめん、部屋に戻る」

「真幸？」

「ちょっとだけほっといて、ごめん」

ささくれた神経をおさめたくて、なのになにできない。背を向け、部屋へと引っこもうとした真幸の腕を、直隆が掴んだ。

「待ちなさい、そんな顔色をして、いったいどうした」

「なんでもない」

「なんでもなくはないだろう？ なにか気に障ったのなら」

「—だから！」

真幸は手を振りほどいた。直隆が一瞬目をまるくし、その顔を見たときたんにこらえていた感情が一気に噴きだした。

「だから、なんで、直隆さんがそこまで譲っちゃうんだよ！ 俺いま、ほんと最悪なのにさ。なんで気遣ったりすんの！」

「真幸？」

「あんた、ぜんっぜん悪くないのに、俺がただ、だめで……っ」

両手で顔を覆(おお)い、わななく息を吐きだす。心臓がばくばくと音をたて、全身が脈打っているのがわかった。

「やつあたりしたくないんだ、お願いだからほっといて」

「わたしはかまわない」

「俺がかまうよ！ いま、もう、やっちゃってるじゃん！ やなんだこいうの、ほんとに、ほん……っ」

唐突(とうとつ

)に涙ぐみ、自分の反応にぎよとなる。完全に切れてしまっている。こうなるともはやコントロールがきかない。

真幸はとっさにきびすを返した。コートも脱がないままでいたから、玄関を飛び出すのにもなんら問題はない。

「待ちなさい、真幸！」

叫んで、腕を掴もうとした直隆を振りきった。追ってくるなど涙目で懇願(こんがん)すると、彼は息をのんで腕を引っこめる。たちつくす姿を肩ごしに一瞬だけ見やり、そのまま外へと走り抜ける。

エレベーターのドアが閉まる隙間(すきま)から、真幸を見送る直隆を見つめる。顔をしかめた彼の表情がなにを意味するのか考えることもできないまま、真幸はただ逃げだした。

「は……」

冷たい壁に額をぶつけ、ばかだ、ばかだ、と自分をののしる。

一階に到着したエレベーターからのろのろと降り、どこへ向かおうかと歩きだしたところでメールが着信した。ポケットにいれたままだった携帯をとりだすと、直隆からのものだった。

【Subject: 寒いから】

【風邪をひかないようにしてください。真幸は喉が弱いから、湿度にも気をつけるように】

「……なにこれ」

相変わらず、メールでは丁寧(ていねい)語になる直隆がおかしくて、ちいさく笑う。けれど涙の滲んだ目は、歪(ゆが)むばかりだ。

プチ家出を決めこんだ相手に言う言葉なのだろうか。あんなひどい態度で、怒っていいはずの直隆にどうして心配されてしまうのだろう。

どうして一親にまで見捨てられた人間に、ああも彼はやさしいのだろう。

「っ……とに、さあ。ばか、じゃね……」

うめいたときたん、ぼろっと涙がでた。本当にみっともない、いまさら、三十もすぎてまだ、こんなにも疵はなまなましいままだ。

真幸はマンションのエントランスにずるずるとしゃがみこみ、顔を覆ってしゃくりあげた。

「も、やめたい……しんどい……っ」

夏の終わりから三カ月、数日おきに、冬美がよかれと思って連絡をくれるたび、だめだったの報告を受けるたび、真幸は繰り返し、親に捨てられ続けている気分になっている。

兄との和解で、希望を持ったぶんだけつらかった。こんなことならいっそ、断絶したまままでいたほうがよかったと思うことは何度もあったのだ。

日に日に、やはりもう修復は不可能なのではないかという気分がふくらんだあげく、冷えきった声で父に「謝れ」と言われたことで、たぶんなにかの糸が切れてしまった。

「もうがんばりたくないし、もうがんばらなくていいからさあ、そっとしとけよ……！」

悲痛な声を絞りだし、自分でも見つめたくなかった本音を吐き出す。

直隆にそれを打ちあけられなかったのは、ショックが大きすぎたせいでもある。そしてひとたび「つらい」と言い損(そこ)ねると、意地を張って平気なふりをするのは真幸の悪いくせだ。

そして八方塞(はっぽうふさ

)がりになり、こうしてひとり、爆発する。本当に進歩がないとも思うけれど、気力が根こそぎ萎(な)えている。

指がかじかんで動かなくなるまで、真幸はそこにうずくまっていた。

本文 p39～46 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>